

弁護士法人福岡法律事務所

代表弁護士 福岡 則博、弁護士 尾崎 悠吾

〒665-0845 兵庫県宝塚市栄町2丁目2番1号ソリオ3（5階）

TEL：0797-87-5606 FAX：0797-87-7160

HP：<https://www.fukuma-law.com/>

Mail：office@fukuma-law.com

執筆：弁護士 福岡 則博



Legal F：Forces for Friends, Families and Fortunes（友人、家族、財産を守る力）

空海「声字実相義」（生涯：774年～835年）

① 「訳注 声字実相義」（松長有慶 春秋社）

② 「空海コレクション2」（宮坂宥勝監修 ちくま学芸文庫）

1 まさか自分が空海の本を読むことになるとは思いませんでしたが、これも何かの縁であり、今回、空海の著書のうち「声字実相義」を読みました。結論としては、その内容に圧倒され、ただただ空海の超人的な能力に感服し、感動した次第です。

2 私は、率直なところ、紀元前4世紀に成立していたプラトン哲学に対抗し得る日本の思想はないと思っていましたが、今回、空海を読んでみて、その理知的にして論理的な側面においても、西洋哲学に十分対抗し得るのみならず、ひょっとしたら、それらが解明し得なかった問題についてまで叙述されているのではないかと思うようになりました。

3 本書は、「声字」、すなわち、声と字が、「実相」、すなわち、事物の本質あるいは真の姿を顕わすものであるとする考えを詳細に展開したものであり、「義」が原理・哲理・宗教的意義を指すものとすれば、そのタイトルは、言語実相原論と呼んでも良いのではないかと思います。

聖書は「はじめに言葉ありき」と述べ（新約聖書ヨハネによる福音書）、また、プラトンは、その著書「国家」（The Republic）において、「カウチ」（寝転がることのできる長椅子）とは何かを執拗に追求し、その弁証法的思考によって、ついには善のアイデアに到達しますが、これらの思想とは別個独立のところで、空海は言語および実相の本質を解明するに至っております。

4 本書の読み方としては、前記①の返り点付き原文（漢文）をコピーし、これを前記②の語釈並びに「岩波仏教辞典第二版」を参照しつつ、読んでいきました。空海の使用した文字を一つ一つ辿り、その一つ一つの意味を、まことに不十分ながら考えていく過程は、あたかも空海の世界の一端に触れるような感触を生じさせるものであり、久しぶりの貴重な読書体験となりました。



5 思いつくまま、感想を述べてみましょう。

① 空海の考察は、根本的です。

何から始まるかといえば「響」です。内外の風気わずかに動いて「響」となり、それが「声」となって「名を表し」、「字」となり、「名は体を招き」、これが「実相」としてします。この振動が壮大にして深遠かつ絢爛たる世界に発展していきます。

② 空海は、論理的な思考です。

この論理的というのは、通り一遍ではなく、徹頭徹尾であり、その思考の論理性は全く容赦のないものです。例えば、「声字実相」という3つの語（声・字・実相）の論理的な関係を梵語の文法

を基礎として解釈する場面では、何種類もの解釈を紹介しながら、その中で、①「声字」は即ち「実相なり」とするのを大日経の解釈であるとして示しつつ、これとともに、②「声と字と実相」とは極めて近接しているとする解釈も示し、この2つの解釈は、深秘であるとしています。空海は基本的に大日経に依拠して本書を著していますから、その立場からすれば、当然①説をもって正当とするものと思われませんが、上記両説に優劣を付けておらず、空海の立場を感じ取ることができます。本書においては、実相は「顕れる」という表現が用いられ、また、実相は、「本不生の義」すなわち本来生まれたり終わったりすることもないとしていることから、現象的な声字と異なるとする立場ともとれるのです。

本書の構成は、堅牢にして緻密であり、その徹底した論理性は現代のコンピューター回路に通ずるように思われます。

③ 空海の態度は、開放的です。

密教には何だか秘密めいたところがあるように思っていたのですが、空海は、顕教的解釈を述べた後で、密教的解釈をしていくものであり、実に明晰でもったいぶったところがなく、**あからさまにストレートに見解を述べて**おります。大日如来の説くところは長い眠りに落ちている衆生の耳を驚かすとしておりますが、空海もまた読み手を驚かさずばかりにあっけらかんと論述しております。

④ 空海の文章は、凝縮的です。

漢文特有の圧縮された文章であり、その短い語句に莫大なエネルギーが込められているのが感じられます。

⑤ 空海の表現は、絵画的音楽的です。

極めて理知的な文章ですが、響きから始まった本書の最後の仏の世界の描写においては、色彩と音楽のパラダイスです。

6 最後にひとこと。本書において、空海は経文等の解釈を徹底しながら、紹介した経文の最後の語句である「法身はこれ実相なり」については解釈

を施していないこと等をもって、本書を未完成とする説があります。ミロのヴィーナスに腕が欠落していることをもって、あるいは、ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」に続編が予定されていたことをもって、それらが未完成であると言えるのでしょうか。私は、空海は書ききったと思います。本書の最後付近には、「衆生にまた本覚法身あり。仏と平等なり。」とあります。最後の解釈は、自分で考えなさいと空海が言っているように読めるのでした。

以上